

# ひょうたん島通信

大槌発! 第23回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## 大槌湾でカモシカ採集!? ～国際沿岸海洋研究センターでの日々是好日～

### 青山 潤

大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター教授

本年4月2日、大槌町のセンターで着任の挨拶を終えた直後、チリ地震による津波注意報発令を知らせるサイレンが町中に鳴り響いた。目の前には東日本大震災で崩壊した防潮堤が横たわり、緊急避難的に積み上げられた土嚢が、大槌湾の静かな波を受け止めている。さて、何をどうすればよいのだろうか？ 津波到達予想時刻までには、まだ十分な時間的余裕もあった。センター教職員からの確かな指示もあった。無かったのは、挨拶以外を想定していなかった私の着替えだけだった。翌朝、まだ暗い道を軽快な作業着姿で走る河村センター長の後ろから、スーツに長靴の間抜けな出で立ちでドタドタとついて行く。念のため港外へ避難する調査船「弥生」の綱取り放しのためだった。そして、まんじりともせず迎えた津波到達予想時刻。幸いなことにどれか津波かわからぬほど、大槌湾は穏やかであった。

5月21日、篠突く雨に叩かれながら、底生生物のサンプリング実習を終えた弥

生は、港へ向かっていた。「何ですかね？」船長の平野さんと船頭（マグロ船などで作業全体を総括する親分をこう呼ぶ）の黒沢さんが、遠く雨に煙る海面に目を凝らしている。近づけば、それは必死に海を渡ろうとする小さなカモシカだった。状況を確証した弥生がゆっくりと回頭を始めた。突然、カモシカはクルリと方向を変え、こちらへ向かって泳ぎ始めた。余計な波を立てぬようソロソロと進む弥生は、たちまち追いつかれてしまう。船にまわりつくカモシカは、かなり弱っているようだ。このまま置き去りにするのは忍びない。早速、船上からタモ網が突き出され、海洋調査にありえぬカモシカ採集が始まった。ブルブルと震えるカモシカは、すいぶんと素直に船上に収容され、我々とともに港へ向かうこととなった。ところで、相手は名にし負う「特別天然記念物」である。捕獲など言語道



断のはずだ。しかし、捕まえてしまった…、それも、海で、タモ網で…。ふと我に返った船頭の指示で、センター事務を通じて大槌町役場へ連絡を取ってもらった。こうして我々も、カモシカも事なきを得たのだった。

ひょうたん島を間近に臨む国際沿岸海洋研究センターの立地を生かし、何か新たなテーマを見つけたい。文献を漁る傍ら、旋網船や定置網船に乗せて貰ったりもしている。そして今、ほんのわずかだけれど、大槌湾という宝箱の蓋に手が掛かったように感じている。

## ぴーちゃん日記

### 錦織“圭”は2015年の全豪と全米で優勝するかも知れない

東日本大震災から3年8ヶ月となった11月11日（十一月十一日は“圭”の字を表す。“鯉”の日です）、大槌町さげます第2ふ化場の復旧工事が完了し、竣工式が行われました。大槌町は新巻鮭発祥の地で、ふ化事業は105年の歴史があり、震災前は3ヶ所のふ化場で約3300万匹の稚魚を放流していました。今回完成した第2ふ化場は約3900㎡の敷地に、長さ15mの飼育水槽を38基整備し、その生産能力は1000万匹。2012年秋に復旧した第1ふ化場と合わせて2000万匹の放流が可能になりました。

三陸沖に回帰するサケは例年半数を「4歳魚」が占めており、今年は震災のあった2011年春の稚魚が4歳魚にあたるため、不漁が見込まれています（10月31日現在で昨年同期の88%の水揚げ）。採卵数も同様であり、このままでは不漁が毎年繰り返される恐れがあるため、岩手県では初めて沿岸部全域一斉実施で、「海産親魚」を採卵用に利用します。海産親魚とは、本来は食用である海で捕獲した雌のサケのことで、通常はそのまま魚市場に運ばれるものですが、少しの間ふ化場に運び込んで採卵します。1匹でも多く放

国際沿岸海洋研究センター職員「ぴーちゃん」です。2013年4月より、岩手大学から出向で来ています。趣味はテニスです。

流稚魚を増やしたいところでのふ化場完成は、サケの定置網漁収入の割合の大きい大槌水産業復興の大きな後押しとなると思います。

沿岸センターでは、大槌町と釜石市の各漁協からご理解と同意をいただき、岩手県から特別な許可を得て貴重なサケの仔稚魚を採集して研究を行っております。研究者は震災後なお一層漁業者と協力し、漁業にも役立てばとの熱い思いで研究に励んでいます。全ての取組が実を結び、数年後大漁に湧く三陸沿岸の魚市場を見たいと強く願っています。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

